

ソーシャルアクション③

園長 児嶋 草次郎

小春日和ののどかな土曜（11月2日）から日曜にかけて、私たち友愛園の中・高生22名と職員11名とで、大分県に一泊旅行に行ってきた。志（こころざし）を養う研修旅行です。費用は子供たちの労作教育（野菜・米づくり）の果実（収益）から捻出しています。子供たちに誇り（プライド）を持たせる旅でもあります。

国民の方々からの支援（税金）でこの生活は成り立っているのだけれど、それに甘んじてしまうのではなく、朝早く起きて掃除をしたり、土曜・日曜短い時間ではあるけど、畑や田んぼに出て野菜作り米作りを自分たちなりに精一杯やっている、そういう自覚が誇り、プライドを育てるわけですが、その成果でもって旅行をすることで心にも余裕が出て、価値観として定着させることができます。石井十次の言わば「旅行教育」です。

この一泊旅行には3コースあり、去年は鹿児島県の西郷隆盛を育てた「郷中教育」を学ぶ旅でした。今年は大分県日田市にある広瀬淡窓の私塾「咸宜園（かんぎえん）」跡を訪ね、その後、中津市の福沢諭吉記念館で「独立自尊」の精神を学びます。ちなみに来年は、熊本県の横井小楠の作った私塾「四時軒」跡、徳富蘇峰記念館、熊本城を訪ねます。

朝の7時45分、あたたかい太陽の光を肌を感じ、園庭のカンナやメランポジウム、沸き立つようにピンク色の花々を付けているフヨウで心を癒しながら、貸切りバスに乗り込み出発しました。車中では、女子たちの出題するなぞなぞを楽しみ、昼前には日田市に到着。予約しておいたレストランで早めに昼食を取って、12時半頃には「咸宜園」跡内の広瀬淡窓の居宅でもあった秋風庵に正座することができました。

この私塾「咸宜園」で学ぶべきことは、一言で言えば集団生活の意義です。もう何度もこの友愛通信に「咸宜園」については書いてきましたが、子供たちも1年1年少しずつ入れ代わっていきますので、3年に一度は必ず訪れるようにしています。友愛園にいる間に一度は現地で学んでほしいのです。

今回案内くださった元教員だという初老の職員の方は、最初に有名な休道の詩を紹介してくださいました。

道（い）うことを休（や）めよ 他郷苦辛（しん）多しと

同袍友あり自らあい親しむ

柴扉（さいひ）暁（あかつき）に出づれば霜雪のごとし

君は川流（せんりゅう）を汲（く）め 我は薪（たきぎ）を拾わん

入学志願者が訪れると、一対一になってこの詩を謡って聞かせ、丁寧に説明し受入れたとか。これは新しい情報です。私は園の子供たちには以下のように説明しています。

「塾生たちは、他郷に来て、苦しいことや辛いことが多いと、愚痴や不満を言うのは止めよう。ここには同じ綿入りの着物を着合う友人がおり、互いに親しくしあっているではないか。まだ日の出ない頃に起きて、柴の粗末な扉（とびら）をあけて外に出ると、一面の霜がまるで雪が降ったよ

うに白い。君は川に行つて水をくんで来い。私は薪（たきぎ）を拾つて来よう。さあ朝の炊事に取りかろう！」

淡窓が最初にお寺で塾を始めたのは1805年、「桂林園」に移転し、さらに「咸宜園」に構えたのが1817年。それから1897年（明治30年）まで92年間に渡つて、全国から集つた5000人を超える若者が互いに寝食を共にしながら学んだと言われています。多い時には200人以上が狭い寄宿舎の中で切磋琢磨し合っています。

思春期の血氣盛んな若者が集団生活をすれば、当然様々な問題が発生します。淡窓自身が「凡（お）そ在塾中長は幼を侮（あなどり）、強は弱を凌（しの）ぎ童弱の徒は身を惜（お）くに処（ところ）なし」とも書いています。つまり、「いじめ」みたいなことも派生したわけです。そこで淡窓は上のような詩を作つて一人ひとりの塾生に呼びかけたわけです。重要なところは、マイナス思考になつて愚痴や不満を言うのを止めようと訴えたところと、最後の「君は川流を汲め我は薪を拾わん」のところ。つまり、師弟同行（どうぎょう）の修行であつたというところです。

淡窓は悪習やいじめ、なれ合い関係を作らないために、規則を作り、また「新米監」（新入生世話係）、威儀監（身なり係）、酒掃監（掃除係）、履監（はきもの係）等、それぞれの生徒に役割・責任（職住制）を与えました。また、「三奪法」と言つて、入門する時、年令、身分、学歴の三つを奪い、皆平等にゼロからスタートさせています。これらは失敗と経験から学び作りあげた教育文化です。

友愛園も45名ほどの集団生活ですが、特に中学生以上の思春期に入ると、様々な誘惑に流されがちです。失敗もあるし、油断すると事件もおきます。先ほど集団生活の意義を学ぶと書きましたが、今から100年くらい前の先人たちは、集団で学ぶ中で様々な困難に直面しながらも、それらを克服しながら自分たちの夢をかなえていったという歴史的事実を知ることが重要です。そうすることで、自分たちの運命を変えるための修行としての施設生活が、価値あるものとなるのです。先人たちも苦勞しながら自分の志を形あるものにしていったと認識できれば、今のこの施設生活に、肯定的・積極的に取り組もうと意欲も湧いてくるでしょう。子供たちは、それぞれ能力に応じて何かを学んでくれたのではないかと思います。

咸宜園での学びが終わると、江戸・明治時代の建物が多く残る豆田町を班ごとに散策したり買物をしたりして、夕方には旅館に入りました。

私には個室が用意されていまして、子供たちから離れるとカバンの中に持参して来た2冊の本を一気に読みました。徳田虎雄著「生きる力」と青木理著「トラオ 徳田虎雄不隨の病院王」です。

実は、10月21日頃に突然、医師で病院経営者の徳田虎雄氏の人生を描いたマンガ本4冊が園に送られて来たのです。送り主は株式会社徳洲会となっていました。おそらく全国600ほどの児童養護施設すべてに寄贈されたのであろうと思います。私はこの人の人生に少し興味を持っていましたので、一通り目を通しました。そして、強い衝撃を受けました。

鹿児島県徳之島の貧しいサトウキビ農家の長男として育ち、ある日、弟が病気にかかり、医者が診てくれなく亡くなったことから、医師を志します。しかし、徳之島という離島の高校から医大に進学できた者はそれまでおらず、大阪に嫁いでいた姉を頼つて大阪の高校に学年を一つ落して転校。そして極貧から抜け出し医者になるためにそれこそ死に物狂いになって勉強し、二浪の末に大阪大学医学部合格を勝ち取るのです。それはすさまじい努力です。

私には、徳田氏のこの必死に努力する姿が、咸宜園に集つてくる当時の若者たちと重なつて見えたし、文化的貧困の中で育ち、この児童養護施設の中で自分の運命を変えようともがいている子供たちともオーバーラップして来たのです。子供たちがこのマンガを読むことで、大いに刺激を受け

るに違いない、そう判断して、あと10セットくらい分けて欲しいとすぐに手紙でお願いをしました。すると間もなく60セットも送ってくださったのです。そしてさらに、先ほど名前をあげた御著書を含めて8冊の本とDVDも送られて来ました。こういうことは、私に言わせれば、神様のお導きです。送られて来たのがちょうど一泊旅行直前でしたので、DVD1本と本2冊を持参していました。一泊旅行2日目(11月3日)、私たちは日田から中津に向かう車中で、DVD「トラオがゆく」(アニメーション)も視聴することが出来ました。「生か死か」と書いた紙を壁に貼りめぐらし、トラオ少年が必死に勉強する姿は、子供たちにとってもショックだったようです。トラオ少年に比べると、ここの生活はあまりにも甘すぎる、そう感じたに違いありません。

それから、福沢諭吉記念館見学し、帰る途中宇佐神宮に参拝し、夕方4時過ぎには無事帰園することができました。

私はその後すぐに株式会社徳洲会の竹林央人様に礼状を書きました。その一部を勝手ながらここに紹介させていただきます。

「今友愛園から大学に進学している子は10人ほどですが、その多くは幼児の時代から施設で生活した子です。少年時代の徳田虎雄先生のように経済的貧困の中に置かれていても、両親の愛情を十分に受けて育った子供たちは、親の後姿を見ているので、放っておいても大小はありますが、志は自然に育ちます。

しかし、虐待や育児放棄(ネグレクト)の環境の中で育った子供たちには、深い所で人間不信があり、志を育てるのは至難の業です。徳田著『生きる力』の中にも『虐待などの過酷な環境で育つと、愛の心が忘却され埋没し、歪められ、憎悪や敵意に変わる人もいるのではないのでしょうか。』と書いてありますが、まさにそうです。私はそういう貧困を『文化的貧困』と呼んでいます。『文化的貧困』の中に入ると、「勉強すれば貧困から抜け出せる」という知恵さえ身に付かないのです。ゴミ屋敷の中で育った子は、生活習慣も自律心も身に付かないし、放置すれば、やがてまたその子は大人になり、同じような生活環境「ゴミ屋敷」を作ります。それが貧困の連鎖です。金銭を与えれば解決するというような単純な問題ではありません。マスコミは経済的貧困しかとりあげません。

最近子供の虐待死亡事件が続いていますが、ああいう家庭の抱える問題は、1週間2週間一時保護したからと言って解決するわけではありません。子供を施設に預かって何年かかけて親子関係を再構築する必要があります。『新しい社会的養育ビジョン』の原則が徹底されるようになると、被虐待児童の逃げ場はなくなりさらに追い詰め、彼らの未来も奪うこととなります。施設児童の大学進学は、まず不可能になります。生活習慣を身につけさせ、人間不信を払拭し、自律心、志を養うには、何年もかかるのです。

日本国民がほぼ物質的には豊かになった今、徳田虎雄先生のような世の中を変えるような人物は、今後どこから現れるのでしょうか。児童養護施設のような世界からではないのでしょうか。その可能性の芽を摘み取ってしまうのが『新しい社会的養育ビジョン』です。」

さて、遅くなりましたがここから「ソーシャルアクション③」に入らせていただきます。子供たちの志を養うために咸宜園等を見学したこと、それからおそらく、児童養護施設児童の志が育てほしいという願いのこもった徳洲会様からの本の寄贈のことなどを最初に書かせていただきましたが、これらの活動を全否定するのが「新しい社会的養育ビジョン」の中の、乳幼児の措置停止や、入所期間の制限(1年以内)なのです。そこを国民の方々に分かっていただきたく書かせていただきました。「漫然とした長期間にわたる代替養育措置はなくなる必要がある」とか「集団力動に過度に依存した養育」は「不適切」、「従来のルールによる集団管理に依拠してきた生活のあり方も根本的に改めて」等施設生活に対する強い嫌悪感さえ感じさせられる言葉が、「ビジョン」の中には巧み

に挿入されています。まさにサブリミナル効果をねらったものでしょう。私たちの先人たちが築きあげて来た教育文化・福祉文化に対する敬意といったものは全く感じられません。

ところで、先月以降の活動について報告させていただきます。

・10月中旬、全国の児童養護施設（605施設）、乳児院（140施設）、児童心理治療施設（46施設）、児童自立支援施設（58施設）、児童自立支援施設（58施設）に向けて、署名活動のお願いの文書を送らせていただきました。最初1万人と目標を書かせていただいたのですが、10万人分は必要と助言してくださる方もいて、目標を上げています。色んな考えの方がおられるでしょうが、500の施設が地域の方々に呼びかけていただき、200人分ずつ集めてくだされば10万人となります。今、ぞくぞくと返信されて来ていますが、施設職員だけではないかと思われる署名もあり、乳児院と児童養護施設にはもう一度お願いしようかとも考えています。乳児院や児童養護施設が危機的状況に追い込まれようとしている現状を関係者の皆様や地域の方々に理解していただくチャンスでもあると思うのです。

・個人やグループで800人分500人分と集めて持って来てくださる方もおられます。頭が下がります。期待・信頼してくださっている方々にキチンと答えていかねばと、緊張感を高めています。ありがとうございます。

・目標数を上げましたので、活動期間は1月末までとし、2月に厚労大臣に提出したいと思います。10月、うれしいニュースも飛び込んで来ました。10名の大学生のうち3名が来年卒業する（新たに3名入学予定）のですが、そのうちの1名が宮崎県の教員採用試験に合格したのです。大臣に要望書を持って行く時、彼も連れて行く予定です。

・11月中旬には、宮崎県の幼稚園、保育園、認定子ども園500施設ほどに、署名お願いの文書を送る予定です。新聞には次々に虐待のニュースが載ります。地域を問わず、そのリスクを背負う家庭はあるわけですし、その家庭、および子供たちを救うために入所施設は必要だということを、保育園、幼稚園関係者にも御理解いただく必要があります。

・県議会の有力議員の方（複数）にも会い、12月議会に取り上げていただき、できれば県議会としても意見書を厚労大臣あてに出していただきたいとお願いしました。おそらく各都道府県の推進計画（里親委託率を含めたもの）案が県当局より12月議会に提出され議論されることになると思います。最後のチャンスとなります。市町議会の議員さん何人かにも県議会に同調するようにお願いしています。心配なのは、里親委託率にばかりに関心がいつてしまい、虐待家庭を救う施設の未来に対する議論が深まらないことです。

このアクションは、社会的養育・養護の子供たち、そして虐待のリスクを背負っている家庭の親御さん、子どもさん方を守る戦いです。皆様の御支援、御協力をよろしくお願い致します。最後に「子どもの未来を守る会」へのカンパをいただけますとありがたいです。郵送料、紙代等がかなりかかっています。ここまで読んでいただきましたことを、感謝申し上げます。